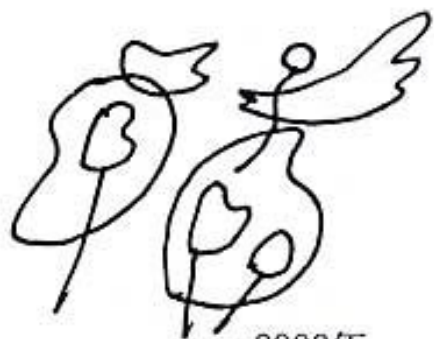


空



2008年

SORA 22号

晴
夜

(22)

—
2

柴
田
佐
知
子

耕
し
て
峰
や
は
ら
か
く
連
な
れ
り

朧
夜
や
肩
身
の
狭
き
厄
の
神

暮出でて英彦山の天狗に仕へけり

—「ばあこうど」九号より—

辛抱をまとへば我も冬桜

鳶職の空にはためく春二番

龍天に登る子供はよく走る

鬼の子も来よと火を焚く春祭

すこやかに老いて花種蒔いてをり

垂
直

荒井千佐代

草摘みて右手冷たし左手も

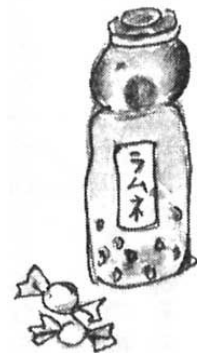
霾れりフェリーは巨き口開き

呪詛のごと宿木の巻く涅槃西風

晩霜予報ことさらに星耀うて

石段の真中すり減り初桜

祝婚歌弾く春スカートの緩むすび



NHK文化センターの講師の仕事をお受けしてから満二年になる。句会は合評制なので、私が教わることもいっぱい。それに一教室と、吟行句会の折は出句もするので、自身の大切な研鑽の場となっている。

その二教室が合同で、先日二回目の雲仙吟行を行なった。昨年は地獄を中心に、今回は鴛鴦の池を中心に散策した。作品は数日後の講座で見せて貰うのだが、吟行中の皆さんの目の輝きからして、いい句が沢山出るだろうと楽しみにしている。

ところで、なぜ雲仙かというと、句会

黙らに檻と鉄扉やさくらら散る

走り根の上に走り根百千鳥

晩年のちちを思へばあたたかし

忌を修す花菜囲ひの磯墓に

うつ伏せに嬰寝て春の夕べかな

路を煮る昏れの灘想ひつつ

椅子の背の高く垂直聖五月

喪の弥撒へ緑雨のあとの石畳

蝶生れて危ふきは我が骨密度

場に行っている「ホテル東洋館」の女将が、私の「沖」での友人であるからだ。長崎駅から雲仙まで往復の0円バス。立派なお料理なのに格安。それに、メインの句会場も女将が使い易いように設置して下さる。句稿のコピー等も手際いいし、昨年は句会中に欠席者がFAX選句を行なったのだが、そういう事も万全である。とにかく、俳人女将の細やかな気配りで充実した句会が持てること請合い。それから、句会後に浸る温泉も薔薇風呂、露天風呂等と趣向が凝らされており、句会の緊張感も解かれようというもの。

因みに、「沖」や「鷹」、「鳴」の大会でも使用したホテルである。能村登四郎先生、藤田湘子先生、伊藤白潮先生も泊りになった由緒あるところだ。

「空」でも、深山霧島の頃か、山法師の頃、又は紅葉や霧水の頃にでも、雲仙吟行しませんか。ご案内は、喜んでさせていただきます。

沼の春

服部 早苗

背景に花ある記念写真かな

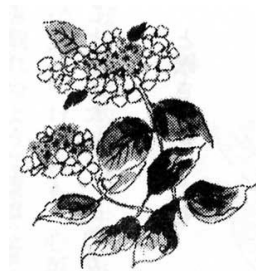
母と娘とその子とつくし摘みにけり

対岸も菜の花見沼通船堀

抱きあげて春夕焼のやはらかに

鳥雲に箆筒うごかす棒を持ち

ジオラマの駅舎春の灯ともりけり



山田の中の一本足の案山子
天気の良いのに蓑笠着けて
朝から晩までただ立ちどおし
歩けないのか山田の案山子

雛壇の海を見てゐる雛たち

吊し雛耳順を越えし吾に揺るる

灯台まぶしやどかり次の巻貝へ

うららかや巨船のおいてゆきし波

ロータリークラブ寄贈の巣箱かな

もぞもぞと浮葉のしたの沼の春

春の日やすりきり五杯粉ミルク

囀やこずゑこまかに落羽松

ゆつくり歩まん小櫓の花の下なれば

これは唱歌「案山子」の一節だが、わが家から車で二十分ほども行けば、この歌の發祥地見沼たんぼに着く。見沼たんぼはかつては、広大な沼だった。享保の時代に干拓され、十二平方キロの新田になった。現在は、田んぼはほとんど見られず、植木畑、家庭菜園、学校のグラウンド、公園などになっているが、昔は見事な稲穂が、見渡す限り波打っていたに違いない。最近、その中の公園に案山子の碑が建てられた。二番までの歌詞と案山子像。

先日、花見がてら、初めてこの案山子像を見た。見上げるような立派な案山子像。何だろう。ちよつと違和感がある。そう、それは人の顔。リアルな人の顔。見慣れた案山子のイメージと違うのだ。やっぱり案山子の顔はへのもへじがいい。そして少し斜めに、倒れそうに大地に立っているのであってほしいな。

空 作 品 抄

柴田佐知子抽出



御開帳ほこりも少し出でにけり	福岡	高倉和子
青き踏むけふのこのみ考へて	東京	中田みなみ
獣らに檻と鉄扉やさくら散る	長崎	荒井千佐代
灯台まぶしやどかり次の巻貝へ	埼玉	服部早苗
夏休み最後の日まで叱られて	糸島	小林朱夏
花吹雪く菩薩も夜叉も身の内に	須恵	苑実耶
鶏当番うさぎ当番春休み	うきは	高倉恵美子
玄海の紺を力に若布刈る	福岡	樋口みのぶ
打つほどに退る木魚や山笑ふ	福岡	青山悠
どんたくの人出も雲も沸き立ちぬ	粕屋	秋千晴
青嵐碎きて骨を撒けといふ	福岡	あさなが捷
春愁の身を励ますは声立てず	行橋	安武晨子
畦焼いて幽霊花を咲かせます	福岡	吉村摂護
初めより銀杏の形に芽吹きけり	福岡	中条さゆり
綿菓子にかくれてみたり春の雷	大阪	堀江恵子



餅の花瑞穂国に枝垂れけり

長崎 鳳 蛮 華

花吹雪浴びつつ神にぬかつけり

福岡 大地 真理

ゆるゆると生きると決めて初湯かな

大阪 青木 朋子

草木に雨の細かき仏生会

神戸 石川 叔子

鶯の声をためして翔ちにけり

神奈川 上村 和子

自転車の荷台春菜のゆれてゐる

福岡 田代 貞枝

久能山東照宮の桜かな

福岡 矢野 百合子

すこし夢また少し夢雪間草

羽曳野 織田 高暢

日脚伸びいろがみ足して万華鏡

東京 荻 悠子

春一番腹筋運動怠らず

福津 野畑 さゆり

ぼたん咲く母在りし頃のはらからよ

福岡 桜三 奈子

鯛焼の肩を並べてパーティーへ

東京 今井 春生

雪積んで一枚となる千枚田

東京 田島 洋子

梵鐘の音の溶けゆく春の暮

東京 森 紀子

花吹雪少年遠くに基地を置き

神奈川 及川 木栄子



眠りより幾度も醒めて雛若し
 梅咲くや山へと返す山の畑
 立つ波に薄氷寄りてまた戻る
 八十八夜水鏡より鯉跳ねて
 百合の香に覚めて佳き日と思ひけり
 女雛だけ持つて入りし壕の中
 素直なる顔になりゆく花の下
 強気の子春一番が連れてくる
 夏来るとTシャツの胸主張せり
 どぶ川に魚がはねて春の猫
 埋立のくぼみ小さく芹の青
 耳鳴りか遠潮騒か春浅し
 よく晴れて箆筒の中も春がきた
 はじめての補聴器つけて桜狩
 遠くより来し先輩と花に酌む

横浜 小川 涼
 東京 山田 正子
 東京 遠山 のり子
 鎌倉 永原 朱
 福岡 葉山 美香
 萩 岸 千手
 福岡 ふじの 茜
 北九州 片田 きく
 東京 南シズ子
 福岡 犬丸 勝子
 北九州 毎熊美智子
 佐賀 堤 堅 策
 福岡 川崎 よしみ
 福岡 神谷 耕輔
 宇美 内藤 玲二